# 夜市の果てに

齊藤　夢月

【あらすじ】

日台ハーフで義足の少年・李小宇（１２）は腹を空かせて台湾の夜市を彷徨っていた。父は事故で他界、母は失踪。途方に暮れていた矢先、周詠晴（７）と詠晴の父・周金福（４０）に出会う。周にトマト飴を買ってもらい公園で周親子と語る中、束の間の安らぎを得る小宇。しかしそこに借金取り立てのヤクザが現れ、周はヤクザから激しい暴行を受ける。小宇は周の財布にあったお金で公衆電話から救急車を呼ぶも、すでに周は帰らぬ人となってしまったことを知り、周の財布を持ち逃げする。生きるにはお金が必要だった。だが盗んだ財布から詠晴と周の写真を見つけた小宇は、後悔の念に駆られるのだった。

１４年後｜小宇は沖縄・久高島の民宿で働いていた。そんなある日、旅行で島を訪れた詠晴と再会する。過去の因縁に気付かず仲を深める２人だったが、小宇の部屋から周の財布を見つけた詠晴は、小宇を罵倒して台湾に帰国する。しかしその日の詠晴の日記には『わたしにも謝らなきゃいけない人がいる』と意味深な言葉が綴られていた。

翌朝｜詠晴は弁護士・陳を訪ねる。周が生前に起こした交通事故の被害者親子に詫びる為、連絡先を尋ねる詠晴。被害者親子は生きていると聞かされていた詠晴だが、父親の方は事故で死亡したことや、条件付き執行猶予のもとで周が多額の賠償金を借金したこと、死亡した男性の息子は事故で義足を余儀なくされたことを知る。その息子の名は李小宇。

その夜｜小宇は台湾を訪れ、詠晴に謝る。そんな小宇に対して詠晴は一部始終を打ち明け謝罪する。事故が起きた夜、周は詠晴を病院に連れていく為に急いでいたと告げ、事故の原因は自分にあるという詠晴。対して自分が車道に飛び出さなければ事故は起きなかったという小宇。心の奥底で自分を責めて生きてきた２人は、１４年越しの再会を通じて、互いの存在に少しだけ救われるのだった。

【登場人物表】

| | | |
|---|---|---|
| 李（リ） 小宇（シャオユウ） | （26） | 日台ハーフ |
| | （12） | 小学生の小宇 |
| | （6） | 幼少期の小宇 |
| 周（ジョウ） 詠晴（ヨンチン） | （21） | 大学生 |
| | （7） | 小学生の詠晴 |
| | （1） | 幼少期の詠晴 |
| おばあ | （84） | 小宇の養母 |
| 周（ジョウ） 金福（ジンフー） | （40） | 詠晴の父 |
| | （34） | 30代の周 |
| | （22） | 20代の周 |
| 李（リ） 大宇（ダイユウ） | （31） | 小宇の父 |
| 陳（チェン） 智偉（ジーウェイ） | （50） | 弁護士 |
| 菅原 康太 | （10） | 小学生 |
| 国吉 優一 | （58） | 商店の店主 |
| （台湾人） | | |
| ヤクザ1 | | |
| ヤクザ2 | | |
| 児童福祉司1 | | |
| 児童福祉司2 | | |
| 店主 | | |
| 少年 | | |
| 女性 | | |
| 少女 | | |
| 男性 | | |
| （日本人） | | |
| 受付係 | | |
| 宿泊客1 | | |
| 宿泊客2 | | |
| 宿泊客3 | | |
| 女優 | | |
| 俳優 | | |
| 船員 | | |

○基隆廟口夜市・エントランス前（夜）
黄色い提灯が両脇に並ぶ夜市。
ネオンサインを掲げた店が並び、薄着にサンダル姿の人々で賑わう。

○同・通路（夜）
痩せ細った李小宇（１２）、Ｔシャツに長ズボン、ボロボロのスニーカーで夜市を歩く。ぐうと鳴る小宇の腹。
屋台の店主、小宇に向かって
店主「（台湾語）エッグタルトはどうだい」
（以降、現地での会話は台湾語）
立ち止まって声の方を向く小宇。
屋台には艶々のエッグタルトが並ぶ。
唾をごくりと飲む小宇。
小宇「いくらですか？」
店主「１個３０元だよ」
小宇、ポケットをまさぐる。拳を開く
小宇、手の平には一元玉が２枚。
バツが悪そうに店主を見上げる小宇。
店主、追い払うように手を振って
店主「カネがないならとっとと行きな」
屋台の前で立ち止まる小綺麗な服装の少年、女性の腕にすがって
少年「ママ、エッグタルト食べたい！」
女性「さっきも月餅買ってあげたでしょ」
少年「エッグタルトも欲しいー」
女性「じゃあ１個だけよ」
少年「イエーイ！」
横目で羨ましそうに少年と女性を見る小宇、背を向けて歩きだす。
美味しそうに屋台飯を頬張る人たちを脇目に、夜市を彷徨う小宇。
と、トマト飴の棒を持って走ってくるポニーテールの周詠晴（７）と衝突。
小宇「うわっ！」
尻餅をついて倒れる小宇と詠晴。
痛そうに顔を歪める小宇。
小宇の足元を見ている詠晴。
小宇のズボンの左裾から覗く義足。

詠晴の視線に気付く小宇、慌ててズボンの裾を引っ張りおろす。
よろけながら立ち上がる小宇、地面に落ちたトマト飴を拾って差し出す。
小宇「ごめんなさい、大丈夫ですか？」
尻餅をついたままじっと小宇の足元を見ている詠晴。
半歩後ずさりする小宇。
駆け寄る周金福（４０）、詠晴に
周「走らないってパパと約束しただろう」
詠晴「ごめんなさい」
周「少年に謝ったのか？」
周の背後に隠れる詠晴、顔だけ覗かせ
詠晴「ごめんなさい」
小宇、気まずそうにトマト飴の棒を詠晴に差し出す。受け取る詠晴。
砂がついて汚れたトマト飴。
トマト飴にかぶりつこうとする詠晴。
周、慌ててトマト飴を取り上げ
周「もうバッチいからダメ」
詠晴「えーまだ食べれるもん」
周「新しいの買ってあげるから」
詠晴「今すぐ食べたいのに」
浮かない顔で再び歩きだす小宇。
周の声「君！」
立ち止まって振り返る小宇。
周「君も一緒にどうだ？　トマト飴」
驚いて周を見る小宇、視線を逸らし
小宇「同情なら結構です」
唖然とする周、クスッと笑う。
周「同情じゃなくてお詫びに。どうかな」
少し考える様子の小宇、小さく頷く。
両膝に手をついて腰を屈め微笑む周。
周「君、名前は？」
小宇「李小宇。小さい宇宙で小宇」
周「いい名前だ」
と優しく微笑む。

○基隆公寓（アパート）・外観（夜）
５階建てのアパート。外壁はコンクリ

ート打ちっぱなしで汚れている。

○李家・玄関前（夜）

ドア横の表札には『李』とある。

ドア前に立つ児童福祉司１、インターホンを鳴らすが誰も応答しない。

児童福祉司１「今日も留守か」

児童福祉司２、カルテを眺める。

『李小宇』のプロフィール、家族構成には『父：李大宇（３１歳で死亡）、母：李恵（３７）・日本国籍』とある。

児童福祉司２「母親が失踪してから１週間。早く息子さんを保護しないと」

児童福祉司１「義足の少年だよな？　いっそ車椅子なら見つけやすいんだが。親戚と連絡はつかないのか？」

児童福祉司２「親戚という親戚はいないようです。夫が事故で他界してからは、息子と２人きりで暮らしていたそうで」

児童福祉司１「そうか……」

児童福祉司２「母親に万が一のことがあったら、少年は施設行きですかね？」

しかめっ面で黙り込む児童福祉司１。

○基隆公園・中（夜）

人通りの少ない公園。

足をぶらぶらしてベンチに座る小宇、地面をぼんやり眺めている。

周の声「お待たせ」

顔を上げる小宇。

眠っている詠晴をおんぶしている周、詠晴をベンチに寝かせて、トマト飴の棒を小宇に差し出す。

ズボンのポケットをまさぐる小宇。

出てきたのは、一元玉２枚だけ。

小宇、バツが悪そうに周を見上げて

小宇「足りない分はいつか返します」

一瞬驚いた顔の周、優しく微笑んで

周「いらないよ。お詫びなんだから」

小宇「いえ、受け取ってください」

と真剣な顔で一元玉２枚を差しだす。
周、やさしく微笑んで
周「じゃあ有難くいただくよ」
と一元玉２枚を受け取り、トマト飴を
差し出す。
小宇「ありがとうございます」
会釈してトマト飴を受け取る小宇、ト
マト飴にかぶりつく。
クスッと笑う周。
周「ウマそうに食うなあ」
小宇の隣に腰掛けて、微笑む周。
ヤクザ１の声「オッサン見ーっけ」
ビクっとして振り返る小宇と周。
背後にはヤクザ１とヤクザ２、周を見
て微笑を浮かべている。
周の表情、強張る。
周「金なら全部返しただろう」
ヤクザ２「久々に会ったのに冷たいなあ」
周「何の用だ？」
ヤクザ２「恩人に対してなんだその態度は」
と鼻で笑い、小宇と詠晴を舐め回すよ
うに見る。小宇の顎をくいっと掴み
ヤクザ２「見ねえ顔。息子もいたのか」
周「その子は関係ない。触れないでくれ」
と腕で小宇をかばう。
ヤクザ２、舌打ちして
ヤクザ２「なら今すぐ利息払えよ！」
周「利息分は数年かけて払うって約束じゃ」
ヤクザ２「んな約束してねーよ」
周「そんな……話が違うじゃないか」
ヤクザ１、周の髪の毛をわし掴みに。
ヤクザ１「娘がどうなってもいいのか？」
周「娘には手を出さないでくれ！」
ヤクザ１「ならとっととカネ出せよ！」
と周を勢いよく殴る。
地面に倒れる周。
ベンチで眠っていた詠晴、寝ぼけ眼で
目を覚ましして起き上がる。
詠晴「パパあ？」
周「詠晴……！」

ふらふらと立ち上がる周。
周の胸倉を掴み、拳で殴るヤクザ１。
再びよろめく周、近くにあった縁石に激しく頭を打って地面に倒れる。
周の頭から流れる大量の血。
ヤクザ２「おい、ヤバいぞ」
後ずさるヤクザ１。
ヤクザ２「い、行くぞ」
ヤクザ１の腕を引くヤクザ２、踵を返して慌てて逃げていく。
地面に倒れる周の身体を揺らす詠晴。
詠晴「パパ！　パパ！　パパア！！！」
その場に立ち尽くし唖然とする小宇。
詠晴「お兄ちゃん！　助けて！」
ハッとする小宇。
小宇「救急車呼ぼう！　携帯ある？」
首を横に振る詠晴。
周りを見渡す小宇。
静まり返った公園、誰もいない。少し離れたところに公衆電話がある。
周のズボンのポケットを探って財布を掴む小宇、立ち上がって
小宇「救急車呼んでくる！」
詠晴「置いてかないで！」
小宇「また戻ってくるから。待っててて！」
と全速力で走っていく。

○同・公園入口前（夜）
１台の公衆電話ボックスがある。
公園から走って出てくる小宇、公衆電話ボックスに入っていく。

○公衆電話ボックス・中（夜）
急いで財布を開ける小宇。
中にはクレジットカードや札束。
生唾を飲み、札束を見つめる小宇。
聞こえてくるパトカーの音。
ハッとする小宇、財布を逆さまにして小銭を取り出し、公衆電話に投入。
受話器を耳に当てて

救急隊員の声「火事ですか、救急ですか」
小宇「あっあの！　今基隆公園で人が倒れて！　救急車をお願いします」
受話器を握り締める小宇。

○車道（夜）
サイレンを鳴らし走る救急車。

○公衆電話ボックス前（夜）
出てくる小宇、空を見上げる。
ぽつぽつと降りだす雨。
小宇、財布を抱きかかえて走り出す。

○コンクリートの道路（夜）
雨の中、財布を抱えて走る小宇。
チリンチリンと自転車のベル。
ハッと避けるもバランスを崩し転倒。
地面に落ちる財布、散らばる硬貨。
硬貨をかき集め、手を止める小宇。
雨に濡れ、街灯の反射で煌めく硬貨。
硬貨を手に取りジッと見つめる小宇。

○基隆公園・中（夜）
ストレッチャーに乗せられた周、全身白い布で覆われている。
傍で泣きわめいている詠晴。
木の陰から様子を見守る小宇、頬には一筋の涙。視線を落とし、財布を強く握り締める小宇。
小宇「ごめんなさい……」
踵を返して走っていく小宇。

○基隆廟口夜市・エントランス前（夜）
どしゃぶりの雨。霞むネオンサイン。

○同・路地裏（夜）
積み重なるゴミの山。
路地裏に駆け込む小宇、壁にもたれてしゃがみ込む。荒い息を整えながら、財布を見つめる。

四隅が剥げた牛皮の財布。
震える手で財布を開く小宇。
はらりと地面に落ちる写真。
写真を拾って見つめる小宇。
赤と青のゴンドラが特徴の観覧車を背景に、笑顔で詠晴を肩車する周の姿。
小宇「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」
と両膝を抱き寄せて、顔を埋める。

○基隆児童養護施設・中庭
サッカーや砂遊びをする児童達。

○同・室内
ＴＶの前で体育座りしている詠晴。
画面には赤と青のゴンドラが特徴の観覧車。テロップには『（台湾語）基隆遊園地、本日をもって閉園』とある。
両膝を抱き寄せて、顔を埋める詠晴。
壁に掛けられた日めくりカレンダーの日付は『２００９年３月２８日』。
風に吹かれパラパラ捲られていく。
×　×　×
『２０２３年５月２５日』。

○同・正門玄関前（朝）
停車中のタクシー。
重そうな段ボール箱を抱えて出てくるポニーテールの詠晴（２１）、タクシーに段ボール箱を積んで、振り返る。
こじんまりした児童養護施設。
ジッと見つめ、深々お辞儀をする。

○基隆第一公寓・外観（夕）
路地裏に面した４階建てのアパート。

○同・外階段（夕）
段ボール箱を抱えて階段を上る詠晴。

○詠晴の家・中（夕）

質素な狭いワンルーム。未開封の段ボール箱が山積みになっている。
入ってくる詠晴、段ボール箱をドスンと床に置いて
詠晴「累死我了～（疲れた～）」
と床に寝転ぶ。

○基隆第一公寓・外観（夜）

○詠晴の家・中（夜）
荷ほどきしている詠晴。
段ボール箱には古いアルバム。
アルバムを手に取り、捲る詠晴。
周と幼少期の詠晴が写る写真たち。
ページを捲っていき、手を止める。
カラフルな写真が並ぶ中、１枚だけ、モノクロ写真。さとうきび畑の前で島民に囲まれて笑う周（２２）が、泥まみれのつなぎに長靴姿で写っている。
写真を手に取り寂しげに微笑む詠晴。
裏を見ると、手書きで『在久高島的甘蔗林（久高島のさとうきび畑にて）』。
詠晴「（台湾語の読み方で）久高島……」
スマホに『久高島』と入力。
表示される久高島の記事や風景。
それらに見入る詠晴。

○久高島・全景（朝）
透明な海に浮かぶ小さな細長い島。

○民宿　海風の丘・外観（朝）
丘の上に佇む２階建ての木造古民家。

○同・小宇の部屋・中（朝）
畳１０畳ほどの散らかった部屋。
布団の上で眠る小宇（２６）。
微かに聞こえる呼び鈴の音。
小宇、唸りながら布団にくるまるも、
ハッと上体を起こす。

○同・1階受付前（朝）
呼び鈴を鳴らす宿泊客1。
小宇「すみませんお待たせしました」
と階段を下ってくる小宇。白い半袖のTシャツに長ズボン姿。
小宇「チェックアウトでよろしいですか？」
宿泊客1「はい。今度は家族で来ます！」
と鍵を渡す。
小宇「ぜひ！　またお待ちしてます」
と会釈。
会釈を返し、歩いていく宿泊客1。
その後ろ姿を嬉しそうに見送る小宇。

○同・居間・中（朝）
TVを観ているおばあ（84）。
入ってくる小宇。
小宇「おはよう」
おばあ「おはよお」
小宇、冷蔵庫からもずくを取り出す。
小宇「いただきます」
と食卓についてもずくをすすりだす。
TVの中の俳優、女優に
俳優「好きです！　付き合ってください！」
女優「ご、ごめんなさい！」
おばあ「どうして断るさ～？」
と興味深げにドラマに見入るおばあ。
もずくをむさぼる小宇をちらっと見て
おばあ「で、恋人はできたね～？」
もずくをすする小宇、首を横に振る。
おばあ「このままじゃ一生独り身さ～」
小宇「いいよ、おばあがいるし」
おばあ「誰か想ってる人はいないわけ？」
小宇「いないよ」
おばあ「忘れられない人の1人や2人は？」
小宇「……いないよ」
おばあ「さてはいるわけね」
小宇「いないよ。ごちそうさまでした」
と手を合わせる。
おばあ、にんまりと小宇を見つめる。
小宇、居心地が悪そうに立ち上がって

小宇「清掃してくる」
とそそくさ居間を出ていく。

○同・外階段～客室内（朝）
丁寧に畳まれたタオルとシーツを手に
階段を上る小宇。
×　×　×
畳に掃除機をかける小宇。
×　×　×
タオルを取り換える小宇。
×　×　×
浴槽をスポンジで清掃する小宇。
×　×　×
洗面台の鏡を雑巾で磨く小宇。
×　×　×
布団のシーツをまとめる小宇。
×　×　×
小宇、額の汗を腕で拭いふぅと一息。
綺麗に清掃された部屋。

○同・小宇の部屋・中（朝）
掃除機を持って入ってくる小宇。
小宇「疲れたー」
と布団に寝転ぶ。
汗でおでこに張りつく小宇の前髪。
リモコンを掴みエアコンにかざすも、
反応なし。
小宇「ん？」
エアコンの電源ボタンを連打するも、
反応なし。
小宇、リモコンの蓋を開ける。
単３電池が２本。
電池を外して手で重さを計る小宇、起
き上がって机の引き出しを漁る。
小宇「あれ」
単３電池は見当たらない。
『４年２組　李小宇』のラベルが貼ら
れた長方形の筆箱を掴んで開けると
小宇「あった！」
と単３電池を１本手に取る。

筆箱の底には色褪せた手のひらサイズの写真。赤と青のゴンドラが特徴の観覧車の前で詠晴を肩車する周の姿。小宇、浮かない顔で写真を見つめる。

○海上を進むフェリーくだかⅢ・デッキ
船頭に立つ詠晴、目を閉じて向かい風を浴びる。風になびくポニーテール。

○久高島・徳仁港
地面に寝そべり日向ぼっこする猫達。
到着するフェリー。
桟橋には復路便を待つ人々の列。
肩に大きなボストンバックをかけた詠晴、フェリーから桟橋へ降りる。

○いちゃりばちょーでー・外観
海に面した古民家の宿。

○同・正面玄関～受付前
詠晴、台湾のパスポートを渡して
詠晴「チェックインお願いします」
受付係、パスポートを開いて
受付係「はい。えっと、ジョウ……」
詠晴「ヨンチンです」
受付係「あっはい。少々お待ちください」
と、古びたＰＣを操作し始める。
受付係「あれ、お名前がないですね」
詠晴「７泊分予約したんですけど」
受付係「あぁ……すみません、システム障害かもしれません。最近調子悪くて……」
詠晴「予約できてないってことですか？」
受付係「大変申し訳ありません。近くに台湾の方がやってる宿があるのでよかったら」
と地図にマル印をつけて差し出す。
マル印の場所は『民宿　海風の丘』。

○同・正面玄関前
詠晴、地図を見ながら出てくる。
地図にぽたぽた落ちる雫。

顔を上げる詠晴。
空から降りだす雨。
詠晴「糟糕了～！（最悪～！）」
と地図を傘にして走り出す。

○民宿　海風の丘・小宇の部屋・中（朝）
周と詠晴が写る写真を見つめる小宇。
写真を筆箱に戻して引き出しを閉め、
浮かない顔。
単３電池をリモコンに入れ、エアコン
にかざす。エアコン、無反応。
小宇「あれ」
リモコンを手のひらでパチンと叩き、
再びエアコンにかざす小宇。
エアコン、無反応。小宇、溜息。

○同・居間・中
入ってくる小宇。
小宇「おばあ、ちょっと出かけるね」
おばあ、メロドラマを見ながら
おばあ「気を付けてよ～」
小宇「今日はもうチェックイン来ないから、
ゆっくりしてて」
おばあ、小宇を見て
おばあ「もうって１人も来てないさ～」
小宇「大丈夫、みんな連泊してるから」
おばあ「じゃあ満室だわけ？」
小宇「ひと部屋だけ空いてるけど今日はもう
来ないから、新規のお客さん。ドラマ観て
ゆっくりしてて」
おばあ「はいはい～」
と、再びドラマに釘付けになる。
そんなおばあを見てふっと笑う小宇。

○同・正面玄関前
雨は止み、地面には水溜り。
宿から出てくる小宇、自転車のサドル
の雨雫を手で拭って自転車に跨る。
自転車を漕ぎだす小宇、地図を見なが
ら歩いてくる詠晴とすれ違う。

顔を上げて立ち止まる詠晴。
『民宿　海風の丘』の看板。
詠晴「找到了（あった！）」
と微笑む。

○同・居間・中
ＴＶを見ているおばあ。呼び鈴の音。
おばあ「んん？」
と顔をあげる。

○同・１階受付前
びしょ濡れの詠晴、呼び鈴を鳴らす。
居間の引き戸を開け出てくるおばあ。
おばあ「はいたい～」
詠晴「あっあの、今夜泊まれますか？」
おばあ「ちょうど一部屋空いてるさあ」
詠晴「ほんとですか！」
おばあ「まっちょーけよー（待っててて）」
と、受付の奥へ。
くしゃみする詠晴。ワンピースの裾を
雑巾のように絞って水気を抜く。
出てくるおばあ、タオルを渡して
おばあ「早く拭かんと風邪引くさあ」
詠晴「あっありがとうございます！」
とタオルを受け取って身体を拭く。
おばあ「あとこれに書いておいてね～」
と宿泊者カードとペンを渡す。
詠晴「あっはい！　泊めてくれてありがとう
ございます！」
深々と会釈する詠晴。

○にぬふぁ商店・外観
古い一軒家の商店。

○同・中
小宇、商品棚の前でしかめっ面。
棚に並ぶ単３電池。２本入りは４３０
円、４本入りは６５０円。
どちらにしようか迷っている様子。
少し離れた場所から小宇の様子を窺う

菅原康太（１０）、緑色のキャップ帽
にボロボロのスニーカー姿。
辺りをサッと見渡して誰もいないこと
を確認し、棚からポーク卵おにぎりを
取る康太。自分のポケットに入れる。

○民宿　海風の丘・１階受付前
宿泊者カードをおばあに渡す詠晴。
詠晴「お願いします」
おばあ「はいはい～」
と宿泊者カードを確認。
おばあ「ジョウさん、台湾の方ね～？」
詠晴「あっはい！」
おばあ「うちの子も日台ハーフだわけさ～」
詠晴「じゃあ、台湾の方なんですか？」
と、おばあを手で示す。
おばあ「うーうん（ううん）、わたしはうち
なーんちゅよ～。あの子の養母でね。あっ
パスポートある？」
詠晴「あっはい」
パスポートをおばあに渡す詠晴。
おばあ「１泊２日でよかったね～？」
詠晴「できれば１週間泊まりたくて……」
おばあ「あぁ～１週間」
詠晴「空いてないですよね？」
おばあ「ちょっと宿泊名簿見てくるさ～」
詠晴「ありがとうございます！」
おばあ、パスポートを持って居間へ。

○同・居間・中
入ってくるおばあ。コピー機にパスポ
ートをセットしてコピーを取る。
机上の宿泊者名簿を手に取り、確認。
おばあ「あー空いてないねえ」
と、コピー機の音が止まる。
パスポートの写しを手に取るおばあ。
名前欄には『周詠晴』とある。
写しを宿泊者名簿にしまうおばあ、宿
泊者名簿を棚に戻し居間を出ていく。

○同・1階受付前
頬杖をつき、海を眺める詠晴。
引き戸の開く音。振り向く詠晴。
おばあ「空いてなかったさあ」
詠晴「大丈夫です。1泊で十分です！」
おばあ「あぁ、でもうちの子の部屋でよければ空いてるさ～」
詠晴「えっいえいえそんな！　大丈夫です」
おばあ「他に泊まるとこあるわけ～？」
詠晴「いえ……」
おばあ「なら泊まっていけばいいさ～」
詠晴「でも」
おばあ「居間に寝させるから大丈夫さ～」
詠晴「でも……いいんですか？」
おばあ「お客さんは多い方が助かるわけ」
詠晴「じゃあ、ありがとうございます！」
微笑むおばあ。

○にぬふぁ商店・店前
乾電池を手に出てくる小宇。
国吉の声「君、待ちなさい！」
振り返る小宇。
商店から走って出てくる康太と、その後を追う国吉優一（58）。
国吉「小宇！　その子捕まえて！」
小宇「えっ」
国吉「万引きだよ！　万引き！」
走ってくる康太と目が合う小宇。
康太、怯えた表情。
康太の手にはポーク卵おにぎり。
小宇、その場で硬直。
小宇とすれ違い、駆けていく康太。
国吉「待ちなさい！」
と康太の後を追いかける。
康太を目で追う小宇。

○民宿　海風の丘・居間・中
さとうきびの皮を剥くおばあ。

○同・客室内～バルコニー

入ってくる詠晴、荷物を降ろす。
バルコニーに出る詠晴。
目の前に広がる青空と透明な海。
詠晴「漂亮啊（綺麗）」
と嬉しそう。

○同・正面玄関前
自転車を降りて宿の前に停める小宇、
宿へ歩き出すも、目を留める。
２階の客室バルコニーには詠晴の姿。
小宇、きょとんとした顔。

○同・居間・中
グラスにさとうきびジュースを注ぐおばあ。
引き戸を開けて入ってくる小宇。
小宇「お客さん来たの？」
おばあ「台湾からちゅらさんが来たさ～」
小宇「台湾……」
おばあ、ジュースを小宇に差し出す。
小宇「えっありがとう」
おばあ、飲もうとする小宇を制して
おばあ「あんたのじゃないよ」
小宇「えっ」
おばあ「台湾のお嬢さんに持ってって」
小宇、渋い顔。
おばあ「あっあと明日から居間で寝てよ～」
小宇「えっなんで？」
おばあ「台湾のお嬢さんが泊まるから」
小宇「えっ一泊だけじゃないの？」
おばあ「一週間」
小宇「僕の部屋貸すってこと？」
おばあ「一週間ぐらいなんくるないさ～」
小宇、小さく溜息。

○同・外階段～客室前
グラスを手に階段を上る小宇、客室の
ドアをノックする。応答なし。再びノ
ックしようとした瞬間、ドアが開いて
ポニーテールの詠晴が顔を出す。

詠晴「なにか用ですか？」
小宇「あっ、ここの宿の者ですけど。これ、よかったら。おばあからです」
とグラスを差し出す。
詠晴、グラスの液体をまじまじと見て
詠晴「これなんですか？」
小宇「さとうきびって知ってます？」
詠晴「さとう……？」
小宇「えっと……あっ（台湾語）甘蔗林！」
詠晴「あぁ、甘蔗林！」
と嬉しそうにグラスを受け取る。
詠晴「お父さん、久高島の甘蔗林で働いてたんです」
小宇「えっそうなんですか？」
詠晴「出稼ぎで日本に来てたんです」
小宇「だから日本語お上手なんですね」
詠晴「私は住んだことないんですけど。お父さんから日本のことよく聞いてたから興味持って。あっハーフなんですよね？」
小宇「はい、まぁ……」
詠晴「台湾に住んだことありますか？」
小宇「もうあんまり覚えてなくて……」
と目を逸らす。
小宇「じゃあ失礼しました。ごゆっくり」
詠晴「あっはい。ありがとうございました」
背を向けて階段を降りていく小宇。
詠晴の声「あっあの！」
振り返る小宇。
詠晴「名前、聞いてもいいですか？」
小宇「小宇です。小さい宇宙で小宇」
詠晴「小宇……いい名前ですね！」
と微笑む。
小宇、ぎこちなく会釈。
小宇「そちらは？」
詠晴「詠晴です。歌詠的詠、晴天的晴（詠うの詠に、晴天の晴）」
小宇「よんちん……」
詠晴「ちょっと変わった名前ですよね」
小宇「あっいえ。いい名前だと思います」
くすっと笑う詠晴。

小宇「え？」
詠晴「社交辞令感、満載です」
小宇「別に社交辞令のつもりは……！」
詠晴「社交辞令でも嬉しいです、有難うございます」
と笑顔。
気恥ずかしそうに会釈して、階段を駆け下りていく小宇。
詠晴、グラスのジュースを一口飲んで
詠晴「太甜了（甘すぎ）」
とグラスを見るも、どこか嬉しそう。

○同・居間・中
台所で皿洗いをしているおばあ。
引き戸を開けて入ってくる小宇。
おばあ「ちゅらさんだったでしょう？」
小宇「わかんない。ジュース喜んでたよ」
おばあ、にやにやと小宇を見る。
小宇、おばあからスポンジを取り上げ
小宇「おばあは休んでて。やっとくから」
おばあ「じゃ～お言葉に甘えるさ～」
TVをつけて座布団に座るおばあ。
と、微かに聞こえてくる鼻歌。
台所に目をやるおばあ。
鼻歌を歌って皿洗いをする小宇の姿。
おばあ、微笑む。

○同・小宇の部屋・中（夕）
入ってくる小宇。
ズボンのポケットから2本入りの単3電池を取り出し、リモコンにセット。
リモコンをエアコンにかざす小宇。
ピッと鳴り風を送り始めるエアコン。
気持ちよさそうにエアコンの風を浴びる小宇、髪がライオンのたてがみのように逆立つ。と、ドアからノック音。
小宇、ビクッとしてドアの方を見る。
詠晴の声「不好意思ー（すみませんー）」
急いでドアを開ける小宇。
小宇「どうしました？」

詠晴「あの、エアコンがつかなくて」
汗でおでこに張りつく詠晴の前髪。

○同・客室内～バルコニー（夕）
入ってくる小宇と詠晴。
小宇、机の上のリモコンを手に取って
エアコンにかざすも、起動せず。
小宇「ちょっと待っててください」
椅子をエアコンの下に持ってきてエア
コンの応急運転スイッチを押す小宇。
が、エアコンは起動せず。
小宇「あれ……」
聞こえてくるヤモリの鳴き声。
小宇「あっもしかしたら……」
と網戸を開けて、足元を見る。
室外機の傍には、か細い声で鳴いてい
る赤ちゃんヤモリ。
詠晴、小宇の背後から顔を覗かせて
詠晴「太可愛了～（かわいい～）」
小宇「ちょっとドライバー取ってきます」
と部屋を出ていく。
バルコニーに出てしゃがみ込み、赤ち
ゃんヤモリを見つめる詠晴。

○同・小宇の部屋・中（夕）
机の引き出しを漁る小宇。
小宇「あった！」
とドライバーを掴み急いで出ていく。
引き出しは開けっ放しのまま。

○同・客室内～バルコニー（夕）
網戸を開けてバルコニーに出る小宇。
詠晴「おかえりなさい」
小宇、ぎこちなく会釈。
室外機前に片膝をついてサービスパネ
ルのネジをドライバーで緩める小宇。
その様子を見守る詠晴、目を留める。
小宇のズボンの左裾から覗く義足。
詠晴、義足をジッと見つめる。
小宇、サービスパネルの蓋を外して

小宇「やっぱり……」
義足から室外機へと視線を移す詠晴。
室外機内部には感電死したヤモリ。
詠晴「もしかして……」
小宇「たぶん、この子の親です」
親ヤモリの傍へ走る赤ちゃんヤモリ、
か細い声で鳴き続ける。
浮かない声で見守る小宇と詠晴。
小宇「運が悪かったですね……」
詠晴「この中に入ると死んじゃうんですか」
と室外機に目をやる。
小宇「中に入っただけじゃ死にませんけど、
基盤に触れると感電死しちゃうんです。ヤ
モリが多い沖縄ならではの現象というか」
詠晴「私がエアコンつけたせいで死んじゃっ
たってことですよね？」
小宇「詠晴さんのせいじゃないです。そもそ
もヤモリが室外機に入らなければ」
詠晴「でもエアコンつけてなければ室外機に
入っても死ななかったわけだし……」
小宇「本当に詠晴さんのせいじゃないです」
とまっすぐな目で詠晴を見つめる。
詠晴「……ありがとうございます」
小宇「……あと、感電して基盤がショートし
ちゃってるので、修理するまでは……」
詠晴「エアコン使えないって事ですか？」
小宇「嫌ですよね……あっよければ僕の部屋
来ますか？」
詠晴「えっ」
と身構える様子。
小宇「あっいやそういう意味では！　僕居間
で寝るんで、僕の部屋どうぞ。あっ、でも
3分、いや、5分待っててください。部屋
片づけてくるので」
と会釈して急ぎ足で部屋を出ていく。
その後ろ姿を見て、微笑む詠晴。

○同・小宇の部屋・中（夜）
部屋に散漫した靴下や本をリズムよく
押入れに放り込んでいく小宇。

と、押入れから薄汚れたサッカーボールが落ちてきて、床を転がっていく。
振り返ってボールを見つめる小宇。

○同・外廊下（夜）
柵にもたれ外の景色を見ている詠晴。
部屋から出てくる小宇。
小宇「片づけ終わりました」
詠晴、振り返って
詠晴「ありがとうございます」
と会釈。両手に何かを載せている。
小宇「それなんですか？」
と詠晴の両手を覗き込んで
小宇「うわっ！」
と身を引く。
詠晴の両手には、死んだ親ヤモリ。
詠晴「あのまま放置するの可哀そうで」
小宇「なるほど……」
詠晴「ここの庭、借りてもいいですか？」
小宇「埋めるんですか？」
詠晴「やっぱり嫌ですか？」
小宇「あっいえ……」
と、客室のドアの隙間から赤ちゃんヤモリが出てきて外廊下を這っていく。
小宇「お墓作ってあげましょう」
と赤ちゃんヤモリを見つめながら。

○同・外庭（夜）
外庭のガジュマルの木の下にしゃがむ
小宇と詠晴。
小宇、木の根元の土を手で掻きわけて
穴を掘る。死んだ親ヤモリをそっと穴
の中へ寝かせる詠晴。親ヤモリに土を
被せて、小さな山を作る２人。
手を合わせて祈りを捧げる。

○同・外階段〜外廊下（夜）
外階段を登る小宇。後に続く詠晴。
小宇のズボンの左裾から覗く義足。
詠晴、義足を見つめる。

２階の外廊下に着いて振り返る小宇。
小宇「これ、僕の部屋の鍵です」
と鍵を差し出す。
義足を見ていた詠晴、パッと顔を上げ
詠晴「あっありがとうございます！　これ、私の部屋の鍵です」
鍵を交換しあう２人。
詠晴「じゃあ、おやすみなさい」
と会釈して小宇の部屋へ向かう。
小宇「あっあの！　押入れは開けないで下さい」
詠晴「えっと、なんのことですか？」
小宇「あ、えっと、〈不要清空衣柜、謝謝〉
（押入れは開けないでください）」
詠晴「あぁ、大丈夫です。開けません」
と微笑む。

○同・小宇の部屋（夜）
入ってきて、押入れに目をやる詠晴。
詠晴「（台湾語）人としてダメだよね」
と押入れから目を逸らすも、気になって再び押入れを見る。抜き足差し足で歩いてそーっと押入れの戸を開ける。
と、サッカーボールが転がり落ちる。
サッカーボールを追いかけ拾う詠晴。
薄汚れたボールには、油性のインクで『（台湾語）走り続けろ』とある。
指で文字をなぞる詠晴。

○同・客室・中（夜）
布団で眠る小宇、うなされている。
小宇「父さん……父さん……父さん！！！」
目を覚ます小宇。額には大量の汗。
小宇、起き上がって溜息。

○同・小宇の部屋・バルコニー（朝）
出てきて伸びをする詠晴、横を見る。
隣のバルコニーで読書する小宇の姿。
詠晴「朝早いですね」
驚いてビクッとする小宇、詠晴を見て

小宇「お、おはようございます……」
詠晴「あの、今日ってお仕事ですよね？」
小宇「チェックインさえ終われば、特には」
詠晴「ほんとですか！　あの、もしよかったら島案内してもらえませんか？」
小宇「いいですけど、これといって見るものないですよ、この島」
詠晴「昨日のジュース、この島のさとうきびで作ったものですか？」
小宇「えっ？　あぁ、おばあの。そうです」
詠晴「甘くて美味しかったです。ちょっと甘すぎるぐらいでしたけど。この島のさとうきび畑、見てみたいです」
小宇「さとうきび畑って別にわざわざ見にいくものでも……」
とロをつぐむ。
詠晴の残念そうな顔。
小宇「見に行きましょう、さとうきび」
詠晴「お願いします！」
とはじける笑顔。

〇狭い一本道の車道
路肩の木の陰に立つ緑キャップ帽の康太、車道の方を見ている。
今にも止まりそうな速度で走るトラック、荷台に積まれたさとうきびの束。
他に車の気配はない。
康太の前をゆっくり過ぎるトラック。
キャップ帽を深く被り顔を隠す康太、トラックの後を追い荷台に飛び乗る。
さとうきびの束から手当たり次第に茎を抜き、地面に落としていく。

〇さとうきび畑沿いの路上
そよ風を受けて自転車を漕ぐ小宇。
小宇「疲れたら言ってください」
が、応答なし。
振り返って止まる小宇。
路上に停められた1台の自転車。
小宇「えっ！　詠晴さん？」

と不安げに辺りを見渡す。
ざわざわと揺れるさとうきび畑。穂の間から詠晴が顔を覗かせる。
小宇、ほっとして
小宇「突然いなくならないでください」
詠晴「あの、写真撮りたいです」
とリュックからチェキカメラを出す。
小宇「あぁ、はい」
詠晴の方まで戻り、自転車から降りる小宇。詠晴からカメラを受け取ろうとするが、渡さない詠晴。
小宇「あの、カメラ……」
詠晴「よかったら一緒に」
小宇「えっ、いや、僕は」
詠晴、カメラを構えて
詠晴「三、二、一」
戸惑いつつもカメラの方を向く小宇。カシャッとシャッター音。カメラから出てくるチェキを覗き込む２人。暗いフィルムにゆっくりと浮かび上がる２人。小宇のぎこちない笑顔。
詠晴「絶妙な笑顔ですね」
小宇「写真、慣れてなくて」
詠晴「普段あんまり撮らないんですか？」
小宇「取るに足らない人生なので」
詠晴「あ、ダジャレ……」
小宇「えっ？　あっいや、狙ったわけでは」
くすっと笑う詠晴、チェキを渡して
詠晴「あげます」
小宇「えっ」
詠晴「こんなに素敵なさとうきび畑に囲まれてるのに、取るに足らないわけないです。理想の田舎暮らしじゃないですか」
小宇「今ちょっと馬鹿にしましたよね？」
いたずらな笑みを浮かべる詠晴。チェキを小宇に押し付けて自転車に跨り
詠晴「行きましょう！」
と自転車を漕ぎだす。
小宇「あっ待って！」
とチェキをTシャツの胸ポケットにし

まい、慌てて自転車に跨る。

○カベール岬・全景
白い砂浜と青い海。

○カベール岬・浜辺
停められた２台の自転車。
浜辺に座る小宇と詠晴。
詠晴、頬杖をついて海を眺めながら
詠晴「なんか久々に休めてる気がします」
小宇「普段、お仕事忙しいんですか？」
詠晴「まだ学生なんです。医学部でバイトする余裕なくて。スネかじってばかりです」
小宇「親御さんお金持ちなんですね」
詠晴「親というより奨学金のおかげです」
小宇「返済するやつですか？」
詠晴「返済しないやつです。もらえるやつです。借金だけはしないって決めてるので」
小宇「親御さんは幸せ者ですね。親孝行な娘さんがいて」
詠晴「喜んでくれてるといいんですけど」
小宇「絶対喜んでますよ！」
詠晴「ありがとうございます。喜んでることを信じます」
小宇「普段あんまり会わないんですか？」
詠晴「父も母も、私が小さいときに……」
小宇「……すみません、何も知らなくて」
詠晴「いえいえ、逆に知ってたら怖いです」
と微笑む。
詠晴「ほんとは生きてるうちにもっと恩返ししたかったんですけど……代わりに恩送りを頑張ることにします」
小宇「恩送り？」
詠晴「もらった恩をくれた人に返すんじゃなくて、他の誰かに送ることです」
小宇「なるほど」
詠晴「私、小さい時は身体が弱くて。大きくなったら恩返しするねってお父さんに言ったら、恩返しはいいから恩送りできる人でありなさいって言われたんです。ほんとは

お父さんにも恩返ししたかったですけど」
小宇「今からでも恩返しできると思います」
詠晴「どうやって？」
小宇「恩送りできる人であることが恩返しにも繋がるというか。恩返しと恩送りって、表裏一体で、繋がってるのかなって」
小宇を見て、頬を緩める詠晴。
詠晴「確かにそうですね」
小宇「僕も恩送り、頑張ります」
詠晴、えっと小宇を見る。
小宇「あ、僕の親ももう……小学生の時に」
詠晴「そうだったんですね……」
小宇「ちゃんと僕たちが恩送りできてるか、今頃ニライカナイで見張ってるかも」
詠晴「ニライ？」
小宇「ニライカナイです。沖縄の言葉で天国のことをそう呼んでて。厳密には海の彼方って意味なんですけど」
詠晴「海の彼方……日本も台湾も海に囲まれてるから、悪いことできませんね」
小宇「常に見張られてるでしょうね」
詠晴「なんかやだな」
小宇「いやですね」
詠晴「海が荒れてるときはきっと、お父さんたちが怒ってるってことですね。恩送りできてないじゃないかー！　って」
フッと笑う小宇。
その笑顔を見て、嬉しそうな詠晴。
詠晴「そういえば、小宇さんの夢は？」
小宇「え？」
詠晴「さっき聞きそびれたので。将来の夢」
小宇「ああ……僕は特に」
詠晴「小さいときに憧れてたものとか」
小宇「んー、もう忘れちゃいました」
と海の彼方を見つめる。
横目で小宇を見る詠晴、目を留める。
小宇のズボンの左裾から覗く義足。
小宇の義足を見つめる詠晴。
その視線に気付いて浮かない顔になる小宇。再び海の方へ顔を向けて

小宇「あれ」
義足を見ていた詠晴、顔を上げて
詠晴「どうしました？」
小宇「あの子……」
と目を細めてなにかを見つめる。
小宇の視線を辿る詠晴。
数m先には緑色のキャップ帽の康太、
海に向かって歩いている。水位は腰の
あたり。どんどん沖へ歩いていく。
小宇、立ち上がって靴を脱ぎ始める。
小宇「ちょっと見てきます」
詠晴「えっいや、私が行きます！」
小宇「僕が義足だからですか？」
詠晴「そういうわけでは……」
小宇「危ないのでここにいて下さい」
長ズボンを膝までまくりあげ、波打ち
際へ走っていく小宇。
その姿を心配そうに見つめる詠晴。
小宇「あの、危ないですよー！」
と海に入って康太に近づく。
康太、振り向いて
康太「ゲッ」
バシャバシャと水しぶきをあげながら
小宇から逃げようとする康太。
後を追う小宇、康太の手首を掴み
小宇「待って！」
康太、怯えた表情。
ハッとする小宇。
康太、小宇の手を振りほどこうとして
康太「なんだよいきなり！　放せよ！」
小宇、康太の手首を掴んで離さない。
小宇「昨日、にぬふぁ商店で会ったよね？」
康太「知らねえよ」
小宇「万引き……してた子だよね？」
康太「……知らねえってば」
小宇「早まらない方がいいよ。僕でよければ
話聞くから」
康太「なんの話だよ。てか誰だよ」
小宇「とにかく死んじゃダメだよ！」
康太「は？　さとうきび洗ってただけだし」

小宇「えっ？」
康太の手には、さとうきびの束。
小宇「じゃあ死のうとしてたわけじゃ」
康太「んなわけねえじゃん」
小宇「よかった……」
康太、まじまじと小宇を見る。

○にぬふぁ商店・店内
売上台帳ノートに記入している国吉。
月額売上高はいずれも芳しくない。
今月分の売上高の特記事項に『万引き１件』と記入。
ノートを閉じて顔を上げる国吉。
店内には誰もおらず閑散としている。

○カベール岬・浜辺
浜辺に並んで座る小宇、康太、詠晴。
義足についた砂を手で払う小宇。
康太、半分に割ったさとうきびの茎をしゃぶってさとうきびの汁をすする。
小宇の義足にちらっと目をやり
康太「それ、まだ履けんの？」
小宇「洗って乾かせば大丈夫」
康太「ふーん」
康太、そっぽを向いて
康太「別に俺のせいじゃないから」
小宇「うん。わかってるよ」
康太「追いかけてくる方が悪いんだよ」
小宇「わかってるよ。別に怒ってないよ？」
康太「そもそも怒られる筋合いねえし」
康太の態度に少しムッとする小宇。
２人の様子を見てくすっと笑う詠晴。
詠晴「なんか２人、仲良さそう」
小宇・康太「（同時に）どこが」
詠晴「ほらね」
くすっと笑う詠晴。
小宇と康太、ムスッと仏頂面。
詠晴「そういえば、名前なんて言うの？」
康太「康太」
詠晴「コウタ君。よろしくね。私は詠晴」

康太「ヨンチン？　変な名前」
詠晴「えぇ、ひどい」
そのやりとりを見て、笑う小宇。
小宇「僕は小宇」
康太「シャオユー？　え、２人とも外人？」
顔を見合わせて笑う小宇と詠晴。

○路上（夕）
風に揺れるさとうきび畑。
自転車を漕ぐ小宇、後に続く詠晴。
小宇の後ろに乗る康太、さとうきびの束を膝にぽんぽん打って暇つぶし。
小宇「家こっちで合ってる？」
康太「うん」
いたずらな笑みを浮かべて、さとうきびの葉を小宇の首筋にあてる康太。
小宇「くすぐったい！」
と肩をすくめて後ろを振り返る。
康太「は？　なにが？」
小宇「今くすぐったでしょ」
康太「くすぐってねえし。てかちゃんと前見て。事故るよ」
小宇「じゃあくすぐんないでよ」
康太「だからくすぐってねえし」
微笑ましそうに２人を見つめる詠晴。

○康太の家・玄関前（夜）
古い小さな古民家。
小宇の自転車を降りる康太、ぼそっと
康太「ありがと」
小宇「どういたしまして」
詠晴「おやすみなさい！」
背を向け、家にとぼとぼ歩く康太。
古民家の明かりはついていない。
小宇「ねえ！」
振り返る康太。
小宇「まだ誰も帰ってきてないの？」
康太「うん」
小宇「じゃあちょっと遊ぼうよ」
康太「俺忙しいから」

小宇「ならいいけど」
と背を向け歩き出す。
康太の声「でもヒマなら付き合ってやるよ」
振り返る小宇、ふっと笑う。

○空（夜）
晴天の夜空に満月。

○康太の家の裏の道路（夜）
照明のない暗い道路。
ゲラゲラ笑いながら走る康太。
康太「踏めるもんなら踏んでみろ！」
地面には月明かりに浮かぶ康太の影。
康太の後を追う小宇、影を踏もうとするも踏めず。
小宇「あーあとちょっとだったのに！」
康太「残念でしたー」
道端に座る詠晴、頬杖をついて２人を見守る。
康太「もう１回やる？」
小宇「ちょっと休憩」
と、両膝に手をついて息を整える。
康太「……ねえ、なんで怒んないの？」
小宇「怒らないよ、こんなことで」
康太「そうじゃなくて。見てたじゃん」
小宇「ん？　あぁ、おにぎりのこと？」
康太「うん」
小宇「やっと認めたね」
康太「……」
小宇「まあでも、怒る資格ないから」
康太「ヘンなの」
小宇「そうかな？」
康太「普通怒るでしょ、大人は」
小宇「……まあ、人を怒れるほど立派な大人じゃないからね」
康太「立派じゃなくても怒ってる大人なんていっぱいいるよ。てか立派じゃない大人に限ってよく怒ってんじゃん、偉そうに」
小宇「それ、自分の親の話？」
康太「……別に」

と、やってくる詠晴。
詠晴「なんの話？」
小宇「今日お店でおにぎり……」
康太「ちょ、チクるな！　なんでもない！」
詠晴「えぇ、気になる。教えてよ」
康太「やだ！」
　顔を見合わせる小宇と詠晴。
小宇「ちなみに明日は何するの？」
康太「別に」
小宇「友達と遊びにいったりしないの？」
康太「別に」
小宇「そっか」
詠晴「２人ともヒマなら明日も遊ぼうよ！」
小宇「僕はいいですけど。全員連泊だし」
詠晴「やった！　康太くんは？」
康太「暇なら付き合ってやってもいいけど」
　とまんざらでもなさそう。

○民宿　海風の丘・外階段前（夜）
　自転車を停める小宇と詠晴。
詠晴「今日は楽しかったです」
小宇「よかったです」
詠晴「じゃあ、また明日」
小宇「また明日」
　階段を上る詠晴、振り返って会釈。
　会釈を返す小宇、目を留める。
　夜空には満天の星空。

○海辺のバス停（朝）
　康太、ベンチに座り足をぶらぶら。
　小宇と詠晴、自転車でやってくる。
詠晴「おはよう。早いね！」
康太「早く行こ」
　と小宇の後ろに乗る。
小宇「朝ごはんは？」
康太「食べてない」
小宇「じゃあまずは充電しにいこう」
　と自転車を漕ぎだす。
　（以下、点描）
　沖縄そばを食べる小宇、詠晴、康太。

×　×　×
岩場で蟹を捕まえる３人。
×　×　×
煉瓦の東屋でアイスを食べる３人。
×　×　×
浜辺で小宇を砂に埋める詠晴と康太。

○さとうきび畑沿いの路上（夕）
自転車を２人乗りする小宇と康太、後に続く詠晴。
背後からブー！　とクラクション。
ビクッとして振り返る一同。
背後の車を運転する国吉の険しい顔。
康太、怯えた表情。

○にぬふぁ商店・バックヤード内（夕）
並んで座る小宇、康太、詠晴。
対面に座る国吉、険しい顔で腕組み。
国吉「なんで万引きした？」
康太「……」
黙って足元を見ている康太。
足元のさとうきびの束に群がるアリ。
国吉の声「腹が減ってたからだろ？」
顔を上げる康太。
国吉「そういうときは盗まず相談しなさい」
康太「……相談したって無駄だよ」
国吉「誰かに相談したことあるのか？」
康太「じゃあ相談したらタダでくれるの？」
国吉「タダっていうのは虫がよすぎるなあ」
康太「ほら」
国吉「出世払いなら考えてやってもいいぞ」
少し驚いた様子の康太。

○同・店前（夕）
店を出てくる小宇、詠晴、康太。
３人の後に続いて出てくる国吉。
国吉「暗くなる前に帰ってな」
小宇「はい」
国吉、両膝に手をついて腰を屈めて
国吉「何か言いたくなったらいつでも来い」

国吉をちらっと見る康太、踵を返して
足早に歩いていく。
国吉、康太を目で追いながら
国吉「謝るのって案外難しいよな。申し訳ないって思ってるときほど謝りづらいっていうか。かみさんが怒ってるときとか怖くて近づけないしさ」
小宇、神妙な面持ち。

○さとうきび畑沿いの路上（夜）
自転車を２人乗りする小宇と康太、後に続く詠晴。
浮かない顔の康太。
険しい表情で考え事をしている小宇。

○康太の家・玄関前（夜）
小宇の自転車から降りる康太。
康太「ありがと」
小宇「どういたしまして」
詠晴「おやすみなさい」
背を向け、家にとぼとぼ歩く康太。
古民家の明かりはついていない。
小宇「また明日！」
振り返る康太、少し驚いた様子。
小宇「また１０時にバス停で待ってるから」
康太「……うん」
小宇「約束だからね」
頷く康太、家へ走っていく。
その後ろ姿を見守る小宇。

○民宿　海風の丘・外階段前（夜）
向かい合う小宇と詠晴。
詠晴「じゃあ、また明日」
小宇「また明日」
階段を上る詠晴、振り返って
詠晴「あの」
小宇「はい」
詠晴「小宇さんって、いい人ですよね」
小宇「えっ」
詠晴「あっいきなりすみません。ただ本当に

そう思ったから、伝えておこうと思って。
じゃあ、おやすみなさい」
と会釈して階段を駆け上っていく。
小宇、浮かない顔。

○民宿　海風の丘・小宇の部屋・中（夜）
鼻歌を歌って入ってくる詠晴。
机に向かって日記を書き始める。
ん？　と手を止め、ペンを振る詠晴。
再び書こうとするもインクが出ない。
と、机の引き出しに目をやる詠晴。
詠晴「（台湾語）失礼しまーす」
と、机の引き出しを開けてまさぐり、
長方形の筆箱を手に取る。

○同・1階縁側（夜）
腕枕をして縁側に仰向けになる小宇。
頭上には満天の星空。
星空を眺めて考え事をする小宇、むく
っと起き上がる。

○同・小宇の部屋・中（夜）
筆箱からボールペンを取る詠晴、手を
を止める。
筆箱の底には手のひらサイズの写真。
眉をひそめて写真を手に取る詠晴。
写真には、観覧車を背景に笑顔で詠晴
を肩車する周の姿。
詠晴「（台湾語）なにこれ……」
写真を唖然と見つめ筆箱を手に取る。
筆箱には『4年2組李小宇』とある。
詠晴「小宇……」
と眉をひそめ、ハッとする詠晴。
詠晴「（台湾語）まさか……」
と、玄関からノック音。
ビクッとしてドアに顔を向ける。
小宇の声「すみません、いますか？」
詠晴、慌てて写真を筆箱にしまい、引
き出しを閉める。
小宇「あの、ちょっと忘れ物があって」

と、再びノック音。
詠晴「どうぞ」
小宇「失礼します」
入ってくる小宇、机へ向かう。机の引き出しを開けて筆箱を掴む小宇。
小宇「失礼しました」
と会釈し、部屋を出ていく。
詠晴「あっあの！」
小宇、振り返って
小宇「はい」
筆箱を見つめる詠晴。
詠晴「……あの、おやすみなさい」
小宇、きょとんとして
小宇「おやすみなさい」
出ていく小宇。パタンと閉まるドア。
釈然としない顔で呆然とする詠晴。

○同・1階縁側（夜）
縁側に座って筆箱を開ける小宇、写真を手に取る。
笑顔で詠晴を肩車する周の姿。
国吉の声「謝るのって案外難しいよな。申し訳ないって思ってるときほど謝りづらいっていうか」
写真を裏返す小宇。
小宇「えっ……」
手書きで『（台湾語）詠晴の誕生日、基隆小孩遊園地にて』とある。
小宇「ヨンチンって……」
写真を見つめる小宇。急いで立ち上がって居間の引き戸を開け、棚の宿泊者名簿を手に取る。緊張した面持ちで、ページを捲っていく。
眉をひそめて唖然とする小宇。
ファイリングされた詠晴のパスポートの写しには、『周詠晴』とある。

○民宿　海風の丘・外観（朝）
どしゃぶりの雨。

○同・１階受付前（朝）
傘を差して頭を下げる小宇。
小宇「ありがとうございました」
駐車場を出ていく乗用車。
顔を上げて、２階を見上げる小宇。
バルコニーに人影はない。
小宇、雨に打たれて浮かない顔。

○同・階段～外廊下（朝）
掃除機を持って階段を上がる小宇。
小宇の部屋の前で足を止める。

○同・小宇の部屋・中（朝）
布団にくるまる詠晴。
ジッと身動きせず、疲れ切った表情。

○同・外廊下（朝）
ドアをノックする小宇。
小宇「あの、起きてますか？」
ドアの向こうからは反応なし。
小宇「話したいことがあるんですけど……」
と同時に隣の客室が開く音。
ビクっとする小宇。
スパイクシューズを履いた宿泊客２、
客室から荷物を持って出てきて
宿泊客２「チェックアウト」
小宇「あっはい。あ、鍵預かりますね」
と宿泊客２から鍵を受け取る。
宿泊客２「てか部屋にヤモリいたんだけど」
小宇「あぁ、ここら辺は特に多いんですよ」
宿泊客２「あぁじゃねえよ、ちゃんと駆除しとけよ」
と舌打ちして階段を降りていく。
小宇、浮かない顔。

○同・客室・中（朝）
掃除機をかける小宇、手を止める。
部屋の隅には死んだ赤ちゃんヤモリ。
靴で踏みつけられた模様。
眉をひそめる小宇。床に膝をつき、赤

ちゃんヤモリをそっと手ですくう。

○同・外廊下（朝）
赤ちゃんヤモリを両手に載せ、客室から出てくる小宇。
と同時に隣の部屋から出てくる詠晴。
小宇を見て、ハッとする詠晴。
小宇の手には死んだ赤ちゃんヤモリ。

○同・外庭（朝）
小宇、木の根元の土を手で掻きわけて穴を掘り、死んだ赤ちゃんヤモリをそっと穴の中へ寝かせる。
赤ちゃんヤモリに土を被せて、小さな山を作る詠晴。
ガジュマルの根元に小さな山（親ヤモリと赤ちゃんヤモリの墓）が並ぶ。
手を合わせて祈りを捧げる２人。
雨が傘に打ちつける音が響く。
小宇、目を開いて横目で詠晴を見る。
祈る詠晴の横顔。
目を閉じ、再び祈りを捧げる小宇。
詠晴、目を開いて横目で小宇を見る。
祈る小宇の横顔。
詠晴、目を閉じ、再び祈りを捧げる。
ゆっくりと立ち上がる２人。

小宇・詠晴「あの」
小宇「あっお先にどうぞ」
詠晴「あ、いえ、お先にどうぞ」
ズボンから写真を出す小宇。
小宇「この写真のことなんですけど……」
色褪せた手のひらサイズの写真。観覧車を背景に笑顔で詠晴を肩車する周。
詠晴、写真を手に取って
詠晴「これ、お父さんがお守り代わりに財布の中に入れてた写真です」
写真の中の周は、満面の笑顔。
詠晴「なんで帰って来なかったんですか」
小宇「……あれからずっと後悔してました」
詠晴「最初からお金目的だったんですか」

小宇「それは違います！」
詠晴「財布盗んで逃げたのに？」
小宇「救急車を呼ぶのにお金が必要で……」
詠晴「でも結局帰ってこなかった」
小宇「……」
詠晴「恩を仇で返すなんて……」
唇を噛み締めて涙ぐむ小宇。
詠晴「泣いても無駄です。もう騙されない」
小宇、涙を堪えながら俯いて
小宇「……助かってほしかった」
詠晴「……心配して損しました」
えっと顔を上げる小宇。
詠晴「救急車を呼びに行く途中で事故に遭ったんじゃないかとか、なにかに巻き込まれたんじゃないかって」
小宇「……」
踵を返し、外階段を駆け上がる詠晴。
その場に立ち尽くす小宇。
傘に激しく打ちつける雨の音。

○同・居間・中（朝）
TVを見ているおばあ。
画面の中の若い女優、俳優に頭を下げ
女優「今まで黙っててごめんなさい」
俳優「……」
と、入ってくる小宇。
おばあ、TVを見ながら
おばあ「おはよう」
小宇「おはよ……」
おばあ、小宇の方を見る。
小宇、台所へ向かい、水を一気飲み。
何度もグラスに水を注いでは飲む。
おばあ、小宇の背中に向かって
おばあ「なんかあったね？」
小宇「なんでもない」
机に手をついてよいしょと立ちあがる
おばあ、小宇のもとへ。小宇の背中を
そっとさすり始める。
小宇の瞳から零れる涙。
おばあ「また次の恋が見つかるさ～」

と、小宇の背中をぽんぽんする。

○海辺のバス停（朝）
ベンチに座り、ボロボロのスニーカーで足元の蟻の行く手を阻む康太。
チリンチリン！　と自転車のベル。
康太、ハッと顔を上げる。
通り過ぎていく観光客の自転車たち。
康太、浮かない顔。

○同・小宇の部屋前
深呼吸し、ドアをノックする小宇。
応答なし。
再びノックするも、応答なし。
隣の部屋の扉が開き、
宿泊客３「すみません、今子どもが寝てて」
小宇「あっすみません」
とノックする手を引っ込める。
宿泊客３「あの、誰もいないと思いますよ」
小宇「え？」
宿泊客３「荷物持って出ていくの見たんで」
小宇「あっ……ありがとうございます」
会釈してドアを閉める宿泊客３。
小宇、ドアノブに手をかける。
鍵は開いたまま。
ドアを開けると、中には誰もいない。

○さとうきび畑沿いの道路
ボストンバックを担いで歩く詠晴。
詠晴、涙目。涙を堪えている。

○民宿　海風の丘・小宇の部屋・中
机の引き出しを漁る小宇。四隅が剥げた牛皮の財布を掴む。

○久高島・徳仁港（夕）
桟橋に停泊中のフェリーに乗り込む人々。列の最後尾には詠晴の姿。ボストンバックを肩にかけ、浮かない顔。

○さとうきび畑沿いの道路（夕）
夕陽に照らされたさとうきび畑。
全速力で自転車を漕ぐ小宇。
ズボンのポケットからはみ出た財布。
十字路に差し掛かる小宇。
ブー！　とクラクションの音。
ハッと車を見てフリーズする小宇。
小宇の寸前で停まる車。
小宇「すいません！」
と頭を下げ、再び自転車を漕ぎだす。
砂利道に落ちた牛皮の財布。
を踏みつけ、交差点を横切る車。

○久高島・徳仁港（夕）
桟橋に停泊中のフェリー。
自転車を漕いでくる小宇、自転車を乗り捨て、桟橋へ走る。
沖へ動き出すフェリー。
桟橋の先頭まで走り立ち止まる小宇。
どんどん遠のいていくフェリー。
を名残惜しそうに見つめる小宇。
ズボンを手で探り、ハッとする。
ポケットを裏返すも、中身は空。

○さとうきび畑沿いの道路（夕）
仏頂面で歩く康太、立ち止まる。
砂利道に落ちた牛皮の財布。
財布を拾い、サッと辺りを見る康太。
辺りには誰もいない。
こっそりとリュックに財布をしまい、
歩き出す康太。

○海上を進むフェリーくだかⅢ・中（夕）
窓際に座る詠晴、写真を見つめる。
笑顔で詠晴を肩車する周の姿。
涙で霞んでいく周の笑顔。

○さとうきび畑沿いの道路（夜）
自転車を引いて歩く小宇。バックライトが点灯したスマホを手に、地面を見

ながら歩いている。
十字路で立ち止まる小宇。
砂利道には何も落ちていない。
自転車を停め、スマホのバックライトを頼りにさとうきび畑を掻きわける。

○那覇空港・滑走路（夜）
夜空へ離陸する飛行機。

○飛行機内（夜）
ぼんやり外の景色を眺める詠晴。
膝の上の日記帳には、『我責怪他，但我也要向一个人道歉……（彼を責めてしまったけど、わたしにも謝らなきゃいけない人がいる……）』とある。
窓に頭をあずけ、目を閉じる詠晴。

○（詠晴の夢）走る車の中・夜
急いで運転している周（３４）。
車のナビ、行先は『基隆総合病院』。
周、バックミラーを見る。
鏡に映る詠晴（１）、後部座席のチャイルドシートでぐったりしている。
周「詠晴！　あと少しだ！　頑張れ！」
アクセルをぐっと踏む周。
前方の信号、黄色に変わる。
車道に転がってくるサッカーボール。
後を追って車道に飛び出す少年。
ハッとして急ブレーキを踏む周。
激しい衝突音。

○元の飛行機内（夜）
ハッと目を覚ます詠晴。
額には大量の汗。
詠晴、窓に頭をもたれ、溜息。

○台湾桃園国際空港・滑走路（夜）
『臺灣桃園國際機場』の看板。
着陸する飛行機。

○基隆第一公寓・正面玄関～外階段（夜）
階段を上る詠晴、踊り場でボストンバックを降ろし、ふうと溜息。
バックを担ぎ直し、再び階段を上る。

○詠晴の家・中（夜）
入ってくる詠晴、明かりをつける。
質素な狭いワンルーム。
ボストンバックをドスンと床に置き、
ベッドにうつ伏せに倒れる詠晴。

○同・小宇の部屋・中（夜）
布団に横たわり、浮かない顔の小宇。
布団にくるまり、ぎゅっと目を瞑る。

○詠晴の家・中（朝）
ベッドの上で呆然と天井を見る詠晴。
むくっと起き上がり、リュックから写真を取り出す。
赤と青のゴンドラが特徴の観覧車を背景に、笑顔で詠晴を肩車する周の姿。
詠晴、涙目。
段ボール箱から古いアルバムを出し、空白のページに写真を差し込む詠晴。
アルバムを閉じて段ボール箱にしまおうとした時、はらりと手紙が落ちる。
ん？　と手紙を拾う詠晴。
古びた手紙。宛名は『李恵』、差出人は『周金福』。台湾語で『あて所に尋ねあたりません』のハンコ。
封筒を開け、便箋を取り出す詠晴。
手紙を読む詠晴、次第に険しい顔に。

○民宿　海風の丘・外階段（朝）
階段を下りる小宇。
キーキーと金属がこすれる音。
立ち止まり、ズボンの左裾を膝まで捲る小宇。膝継手の部分には錆。
小宇、溜息。

○にぬふぁ商店・外（朝）
店に入ろうとして、足を止める小宇。
国吉に頭を下げる康太の姿。
康太「すいませんでした」
地面に落ちる緑キャップ帽。
康太を見つめる小宇。
国吉、屈んで地面に落ちた緑キャップ帽を拾い、汚れを手で払う。
国吉「謝れば許される程世間は甘くないぞ」
俯く康太。
小宇、伏し目に。
国吉「でも今回は許す！」
国吉、緑キャップ帽を康太に被せ、頭にポンと手を置く。
国吉「腹が減ったらいつでもおいで」
こくっと頷く康太、ぼそっと
康太「ありがとう」
優しく微笑む国吉。
２人を見つめる小宇。
国吉、店の外に目をやり
国吉「おっ、小宇！」
小宇、会釈。店に入る。
キーキーと金属がこすれる音。
康太「昨日待ってたのに」
小宇「あぁごめん……ちょっと色々あって」
と浮かない顔。
きょとんとした顔の康太。
小宇「あの、重曹ってありますか？」
国吉「重曹はないねえ。なに用？」
小宇「錆び取りに使いたくて」
国吉「シンク用の洗剤ならあるけど」
小宇「あっあの、義足用で」
国吉「義足に重曹使っていいの？」
小宇「モノは試しかなって」
国吉「重曹は本土に行かねえとねえなあ」
小宇「そうですよね……」
国吉「来月本土行くから買ってこようか？」
小宇「あっいえ、大丈夫です！」
国吉「遠慮しないでいいんだぞ」
小宇「ありがとうございます。なるべく早く

直したいんで、今週末にでも本土に行って修理してもらってきます」
話を聞いていた康太、ぼそっと
康太「海に入ったせいじゃん、錆びたの」
国吉「ん？　なんのことだ？」
康太「この前海で、俺が溺れてるって勘違いして海に入ってきたんだよ。義足のまま」
国吉「ほほお～。ヒーローじゃねえか」
と小宇に感心のまなざしを向ける。
小宇「いえ、ただのおせっかいでした」
康太「言っとくけど、錆びたの俺のせいじゃないからな！」
小宇「わかってるよ。どうせそろそろ替え時だったし、ちょうどよかった」
康太、バツが悪そうにそっぽを向くも
康太「あっ！」
国吉・小宇「ん？」
康太「本土に行くついでに警察行ける？」
小宇「えっ警察？」
国吉「警察ってついでで行く所じゃねえぞ」
康太「仕方ないじゃん、この島に警察ないんだから」
とリュックから財布を取り出す。
四隅が剥げた牛皮の財布。
康太「これ、届けといてくんない？」
小宇、唖然。
国吉「島で見つけたんなら島民のもんだろ」
康太「観光客のだよ、絶対。ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＴＡＩＷＡＮって書いてあるし」
小宇、財布を手に取り
小宇「これ、どこで見つけたの？」
康太「え、普通に落ちてた」
小宇、財布を手に取って
小宇「ありがとう」
康太「え、それ自分の？」
小宇「いや。でも持ち主知ってるから届けてくる。ほんとありがとう！」
店を出て駆けていく小宇。
顔を見合わせる康太と国吉。

○民宿　海風の丘・居間（朝）
引き戸を勢いよく開ける小宇。
おばあ、座布団の上で眠っている。
そーっと棚にある宿泊者名簿を掴み、
中から宿泊者カードを抜き取る小宇。
宿泊者カードには『周詠晴』とある。

○陳法律事務所・外観
『（台湾語）陳法律事務所』の看板。

○同・中
対面で座る詠晴と陳智偉（５０）。
（以降、詠晴と陳の会話は台湾語）
陳「お元気でしたか？」
詠晴「はい。あの、その節は父がお世話になりました」
陳「いえ。今日はどうされましたか？」
詠晴「被害者の方の連絡先を知りたくて」
陳「どうしてまた今になって？」
詠晴、古びた手紙を机の上に置く。
宛名は『李恵』、差出人は『周金福』。
詠晴「たまたまこれを見つけて」
陳「もうご遺族もそれぞれの人生を歩み始めているところですし」
詠晴「ご遺族……？」
ハッと口をつぐむ陳。
詠晴「生きてるんですよね？」
とすがるようなまなざし。
陳「……お父様より、娘さんには詳細を伏せるよう言われておりますので」
詠晴「生きてないんですか？」
不安げに陳を見つめる詠晴。

○海上を進むフェリーくだかⅢ・中
窓際に座る小宇、スマホを操作。
画面にはＬＣＣの航空券予約サイト。
出発地に『沖縄（那覇）』、到着地に『台北（桃園）』が設定されている。
小宇、緊張した面持ち。
震える手で『購入手続き』をタップ。

○陳法律事務所・中
弁護士を見つめる詠晴。
詠晴「正直に話してください」
陳「ただ、中には知らない方がいいことも」
詠晴「やさしい嘘ってことですか？」
詠晴から目を逸らして黙り込む陳。
陳「やさしい嘘だとしたら、どうしますか」
詠晴「やさしい嘘ってなんだと思いますか」
陳「相手を傷つけないための嘘、とか……」
詠晴「やさしい嘘って、誰かを守るためにつく嘘のことだと思うんです。でも、自分を守るためにつく嘘はやさしい嘘じゃなくてただの嘘です」
陳「……確かにお父様は娘さんに嘘をついていたかもしれません。でも、それは娘さんを守るためでもあって」
詠晴「自分の過ちを隠すための嘘は、自分を守るための嘘です。もしそれが私を守るための嘘だったとしても……」
陳、困ったようにバルコニーを見る。
植木に止まる一羽のアゲハ蝶。
ハッとする陳、目を細めてアゲハ蝶を見つめる。再び詠晴の方に向き直り
陳「では、お話しします」
詠晴「はい」
陳、喉を整え、ゆっくり話し始める。
陳「14年前の事件についてですが……」
スカートの裾をぎゅっと握る詠晴。

○（回想）走る車の中
急いで運転している周（34）。
車のナビ、行先は『基隆総合病院』。
周、バックミラーを見る。
鏡に映る詠晴（1）、後部座席のチャイルドシートでぐったりしている。
周「詠晴！　あと少しだ！　頑張れ！」
アクセルをぐっと踏む周。
前方の信号、黄色に変わる。
車道に転がってくるサッカーボール、
を追って車道に飛び出す小宇（6）。

慌てて後を追う李大宇（３１）、小宇を後ろから抱き抱える。
ハッとして急ブレーキを踏む周。
周の車、直後に２人に衝突。
地面に倒れる大宇と小宇。
動揺する周、慌てて車を出る。
後部座席の詠晴、ぐったりしたまま。

○（回想）車道
地面に倒れる大宇と小宇。
周「救急車……救急車……」
震える手でスマホを取りだす周。
小宇の左足、タイヤの下敷きに。
地面に倒れ、ぐったりしている小宇。
陳の声「息子さんは奇跡的に一命を取り留めましたが」
頭から血を流している大宇。
陳の声「お父様は即死でした」

○元の陳法律事務所・中
詠晴、唖然。
詠晴「２人とも助かったんじゃ……」
陳、伏し目に。首を横に振る。
詠晴「父が刑務所に行かなかったのは、被害者の方が助かったからじゃないんですか」
陳「スピード違反が認められていたことから実刑判決になる可能性が極めて高かったのですが。調査を通じて、お父様が乗っていた車がリコール対象車だったことが判明したんです」
詠晴「あの車が……？　日本製なのに？」
陳「はい。車速センサの不具合で、速度が正しく表示されていなかったようで……危険運転ではなく過失運転と判断された結果、条件付き執行猶予がつくことに」
詠晴「……お金で解決したってことですか」
陳「お金で解決できるものじゃないことは、周さんが誰よりもわかっていたはずです。ただ、男手一つで娘さんを育てるためには……実際、ご遺族が提示したよりも遥かに

多い賠償金を払っていたんです。あんな大金普通は払えません。闇金には手を出すなと忠告したのですが私の力が及ばず……」
詠晴の目に浮かぶ涙。
陳「すみません、余計なことを」
詠晴「……息子さんは生きてるんですよね」
陳「日本に送還されたそうです」
詠晴「日本に？」
陳「息子さん、日本と台湾のハーフで。事故の後は日本人の母親と暫く２人で暮らしていたそうなんですが、ある日突然母親が失踪、というか賠償金を持ち逃げして。沖縄の女性のもとに養子として引き取ってもらえることになったんです」
詠晴「沖縄……連絡先、ご存じですか？」
陳「知っていたとしても教えるわけには」
詠晴「お願いします。謝りたいんです」
陳「決して詠晴さんのせいでは」
今にも泣きそうな詠晴の目。
陳「……ちょっと失礼します」
と立ち上がり、棚のファイルを漁る。
唇を噛み締め俯く詠晴。
陳「まだ引っ越してないといいですが」
詠晴の前に座り、メモを差し出す陳。
メモには電話番号と、久高島の住所。
陳「最終的な判断はお任せしますが、会わない方がお互いのためという場合も。いくら一命を取り留めたとはいえ、息子さんは義足生活で相当苦労されてきたはずですし」
詠晴「義足……？」
陳「助かるためにはそれしか道がなかったようで……」
メモを手に取る詠晴。スマホを出して地図アプリに住所を入力。
表示されたのは『民宿　海風の丘』。
陳「あっ名前書くの忘れてました。名前は」
詠晴「小宇さんですか？」
陳「えっ。あっ、書いてありました？」
と詠晴の手元のメモに目をやる。
詠晴、唖然。

○民宿　海風の丘・居間・中
つけっぱなしのＴＶに映るドラマ。
座布団で眠るおばあ、目を覚ます。
おばあ「あがががが（あイテテテテ）」
と腰をおさえて起き上がる。
机の上には小宇が書いたメモ。
『急用で台湾に行ってきます。なるべく早く帰ってきます』とある。
メモを見つめるおばあ、きょとんと
おばあ「台湾？」
と、顔を上げる。
ＴＶ画面には、桟橋を走って出発するフェリーを追いかける俳優の姿。
おばあ「もしかして追いかけにかね～？」
とにんまり。

○台湾桃園国際空港・滑走路（夕）
『臺灣桃園國際機場』の看板。
曇天の中、着陸する飛行機。

○同・ターミナル内（夕）
エスカレーターを下りる小宇、リュックから宿泊者カードを取り出す。
宿泊者カードには詠晴の電話番号。
スマホに番号を入力し発信する小宇。
プルルル……。
暫く待つも応答なし。切ろうとすると
詠晴の声「你好」
ビクッとする小宇、どぎまぎしながら
小宇「あ、あの！」
詠晴「（台湾語）折り返し電話しますので、緊急の場合は伝言をお願いします」
小宇、ガッカリした顔。

○基隆市内・歩道（夕）
雨に打たれながら呆然と歩く詠晴。
ブー、ブー、と鳴りだすスマホ。
ぼんやりスマホに目をやる詠晴。
発信元は未登録の番号。
着信には応答せず、再び歩き出す。

と、届く留守電通知。
詠晴、留守電を再生すると
小宇の声「あ、あの、小宇です」
ハッと立ち止まる詠晴。
小宇の声「いきなりごめんなさい。今、台湾にいて……少しだけ会えませんか？　また後で折り返します」
詠晴「なんで……」
発信ボタンを押そうか迷う様子。
と、後ろから車のクラクションの音。
ビクッとして振り向く詠晴。
地面に落ちるスマホ。
そばを猛スピードで通り過ぎる車。
地面のスマホ、画面が割れている。

○基隆公寓・外廊下（夕）
外廊下の隅に立っている小宇。小宇の服は雨でぐっしょり濡れている。
階段を上ってくる詠晴、立ち止まって
詠晴「えっ……！」
小宇「あの、すみません突然！」
詠晴「どうしてわかったんですか？」
小宇の手元に目をやる詠晴。
雨でしなびた宿泊者カード。
小宇「ちゃんと謝りたくて……」
とリュックから財布を出し、渡す。
四隅が剥げた牛皮の財布。
財布をじっと見つめる詠晴。
小宇「あの、本当にごめんなさい」
と頭を下げる。
詠晴「……」
小宇「恩返しどころか、恩を仇で……」
詠晴「もういいです」
小宇、ゆっくりと顔を上げて
小宇「見ず知らずの僕にあんなに親切にしてくれた人の財布を盗んで……。ずっと後悔してて。でも耐えきれなくて。生きる為には仕方なかったって自分に言い聞かせてはそんな自分が嫌になって……」
と、口をつぐむ。

詠晴の頬を伝う涙。
小宇「本当にごめんなさい……」
詠晴「……」
財布を詠晴に預けて頭を深く下げ、階段を下りていく小宇。
詠晴「あの！」
振り返る小宇。その拍子に義足が階段のふちに引っかかって転倒する。
詠晴「小宇さん！」
と階段を駆け下り、小宇のもとへ。
詠晴「大丈夫ですか！　怪我は？」
小宇、階段の柵に掴まって立ち上がり
小宇「大丈夫です」
小宇の足元に目をやる詠晴。
小宇のズボンの左裾から覗く義足。
詠晴「ずっと痛かったですよね……」
小宇「いえ、痛くないんです。よくも悪くも感覚がないので」
と義足に目をやる。
詠晴「……ごめんなさい」
小宇「いや、詠晴さんが謝ることでは」
詠晴「大切なものを盗んだのは、私達の方でした」
小宇「えっ？」
詠晴、鞄から古びた手紙を出して
詠晴「今まで何も知らなくて……」
と手紙を渡す。
きょとんとして受け取る小宇。
小宇「えっ」
表面の宛名は『李恵』。
裏返すと、差出人は『周金福』。
小宇「なんで……？」
と困惑のまなざしで詠晴を見る。

○基隆廟口夜市・エントランス前（夜）
霧雨。ぼんやり灯る黄色い提灯。
いつもより人が少ない夜市。

○同・通路（夜）
フードを目深く被って歩く小宇。

キーキーと義足の金属がこすれる音。
屋台の店主、小宇に向かって
店主「（台湾語）エッグタルト美味しいよ」
フードから覗く小宇の虚ろな目。
その虚ろな目にドキッとする店主。
小宇、屋台の横を通り過ぎていく。
と、トマト飴を手に走ってくる少女。
振り向いて少女を目で追う小宇。
傘もささずに走っていく少女の姿。
男性「（台湾語）こら、走らない！」
と少女の後を追って走る男性。少女を
傘に入れ、手を繋いで歩きだす。
その２人の後ろ姿を見つめる小宇。

○詠晴の家・中（夜）
四隅の剥げた財布を胸に抱き、ベッド
に横たわる詠晴。

○久高島・徳仁港
停泊中のフェリーから降りる小宇。

○にぬふぁ商店・店内
ビール瓶のケースを椅子替わりに座る
康太、ポーク卵おにぎりをむさぼる。
入ってくる小宇。
康太「いらっしゃーい」
品出し中の国吉、顔を上げて
国吉「おお、小宇」
小宇「どうも」
小宇、缶ビールを取ってレジへ。
小宇「お願いします」
国吉「俺でよければ話聞くぞ」
小宇「え？」
国吉「酒飲まない奴が飲みたくなるときって
そういうときだろ」
小宇、返事に困って康太を見る。
康太「話聞いてもらいな」
と店の外を顎で指す。

○同・店前

ベンチでビールをぐびっと飲む国吉。
小宇「すみません、奢ってもらっちゃって」
国吉「ビールの１本ぐらい、たまにはな。あっ、でも誰かさんみたいに万引きはダメだぞ？　盗まれるのと奢るのは違うからな」
と、店の中の康太に目をやる。
おにぎりをむさぼる康太の姿。
そんな康太を見つめる小宇。
国吉「俺もガキんときにさ、よくさとうきび盗んでたんだよ。当時の沖縄は今よりずっと貧乏だったしさ」
黙って聞いている小宇。
国吉「家に食うモンなくて常に腹減ってたからさ。だからあいつの気持ちもわかるというか、俺も怒れるタチじゃねえんだよな。ガキんときに少しぐらいやんちゃしてた方が、大人になったときに人のことを許せるようになるんじゃねえかな」
黙って缶ビールを親指でさする小宇。
と、店から顔を覗かせる康太。
康太「そういえばあの人帰っちゃったの？」
小宇「え？」
康太「あの女の人」
小宇「ああ、うん」
康太「１週間いるんじゃなかったの？」
小宇「……」
国吉「さては喧嘩したな」
小宇「……まあ、色々あって」
康太「気になるなら謝りに行きなよ」
国吉「喧嘩の理由も知らずに小宇が悪いって決めつけるのはよくないぞ？」
康太「親ヅラすんなし」
国吉「生意気な口聞くならおにぎり返せ」
康太「もう食べちゃったもーん」
と言い合いを始める国吉と康太。
その様子を見てふっと笑う小宇。
缶ビールを見つめて考え込む。

○詠晴の家・中（夕）
ベッドに横たわる詠晴。

視線の先には、牛皮の財布。
起き上がり、財布を開く詠晴。
詠晴「（台湾語）全然使ってない……」
財布の中にはしなびた札束と硬貨。

○カベール岬・浜辺（夕）
浜辺に置かれた『李恵』宛ての封筒。
そのそばに座って手紙を読む小宇。
周の声「（台湾語）私がやったことは決して許されることではありません。旦那様の命を奪っておきながら、ご子息の未来を奪っておきながら、私だけが生き長らえることなど、許されることではないと思います。しかし」

○詠晴の家・中（夕）
地べたに座り、アルバムを捲る詠晴。
周と幼少期の詠晴が写る写真たち。
周の声「私には娘がいます」
と、アルバムを捲る手を止める詠晴。
開かれたページには、モノクロ写真。
さとうきび畑の前で島民に囲まれて笑顔の周（２２）。

○カベール岬・浜辺（夕）
浜辺で手紙を読む小宇。
周の声「娘が大きくなるまでは、どうか私に生きることをお許しください」
手紙に落ちる涙。涙で染みる文字。
胸ポケットからチェキを出す小宇。
さとうきび畑の前で並ぶ小宇と詠晴の姿。詠晴の屈託のない笑顔。

○民宿　海風の丘・正面玄関～縁側（夜）
歩いてくる小宇、立ち止まる。
三線の音。引き戸の障子に浮かび上がる、猫背で三線を弾くおばあの影。
縁側に座り、目を閉じる小宇。
聞こえてくるおばあの弾き語り。
鳴りやむ三線の音。引き戸が開いて

おばあの声「いつの間に帰ってたね～？」
ビクッとする小宇、背を向けたまま
小宇「ついさっき」
と、サッと涙を拭う。
おばあ「泣いてるわけ～？」
小宇「ううん、泣いてないよ」
おばあ「なにがあったね～？」
小宇「別に何もないよ」
三線を手に、小宇の隣に座るおばあ。
２人の足元を這うヤモリの姿。
おばあ、ヤモリを見ながら
おばあ「ここのヤモリはよく鳴くさ～」
黙ってヤモリを見つめる小宇。
おばあ「なくのはいいことさ～。沢山なくの
は長生きの秘訣さ～」
と小宇の背中をぽんぽんする。
小宇「じゃあ泣かないようにする」
おばあ「早死にしたいわけ～？」
小宇「……なんか色々疲れちゃって」
おばあ「小宇の命は小宇だけの物なわけ？」
小宇「え？」
おばあ「自分の命は自分の物だけじゃない。
今まで食べた魚とか肉とか野菜とかに生か
されて生きてるわけ。ひとりの命はひとつ
に見えるけど、本当はたくさんの命が集ま
ってできてるわけ」
小宇、黙って聞いている。
おばあ「生きてれば辛いことも色々あるけ
ど、自分だけの命じゃないって思ったら、
もう少し踏ん張ろうって思えるわけね～」
と三線で『涙そうそう』を弾きだす。
おばあ「ふ～るい～ア～ルバ～ム～捲り～」
おばあの隣で空を見上げる小宇。
夜空に輝く星。

○詠晴の家・中（夜）
眠れずにベッドで寝返りを繰り返す詠
晴。溜息をついて起き上がり、スマホ
を手に取る。
検索画面を開き、『李小宇』と入力。

検索上位にＳＮＳアカウントが数件出てくるがいずれも同姓同名の違う人。と、スクロールの手を止める詠晴。
『（台湾語）李小宇、全国少年サッカー大会でＭＶＰに選出』の記事。
眉を顰める詠晴。
恐る恐る記事をタップ。
記事の写真には、少年がゴール目がけてボールを蹴る瞬間が写っている。
画像を拡大する詠晴。
写真の少年は小宇（６）。
息を呑む詠晴。
さらに記事をスクロールすると、大宇（３１）に肩を抱かれて誇らしげな小宇（６）の写真。片手にはトロフィー、片手にはサッカーボール。
サッカーボールには油性のインクで『（台湾語）走り続けろ』とある。
短パン姿の小宇。左脚に義足はない。
写真下には『（台湾語）李小宇君、父親でありコーチの李大宇氏と』。

○同・小宇の部屋・中（夜）
入ってくる小宇。殺風景な部屋。
押入れを開ける小宇、えっと驚く。
整理整頓された押入れ。
ん？　と目を留める小宇。
押入れの隅には、ピカピカに磨かれたサッカーボール。ボールには付箋メモが貼られている。
サッカーボールを手に取る小宇。
メモを読み上げる詠晴の声「ごめんなさい、気になって押入れ開けちゃいました。お詫びに片付けておきました」
メモを見つめる小宇。ピカピカに磨かれたサッカーボールをそっと撫でる。

○民宿　海風の丘・小宇の部屋・中（朝）
布団で眠る小宇。傍に置かれた義足。
目を覚まして起き上がる小宇。

カーテンの隙間から差し込む朝陽に照らされたサッカーボールを見つめる。

○詠晴の家・中（朝）
目を覚まして起き上がる詠晴。
ベッド脇の牛皮の財布を見つめる。

○民宿　海風の丘・居間・中（朝）
ＴＶを観ているおばあ。
小宇、引き戸を開けて顔を覗かせ
小宇「ごめん、ちょっと出かけてくる」
おばあ「どこに？」
小宇「ちょっと。明日には帰るから！」
と引き戸を閉め、走っていく。
おばあ「青春だね～」
とにんまり。

○基隆第一公寓・外階段（朝）
階段を猛スピードで駆け下りる詠晴。
と、階段を登ってくる住民にぶつかりそうになる。
詠晴「不好意思！（すみません！）」
と頭を下げ、階段を駆け下りていく。

○さとうきび畑沿いの道路（朝）
強風で波打つさとうきび畑。
全速力で自転車を漕ぐ小宇。

○久高島・徳仁港（朝）
停泊中のフェリー。
やってくる小宇、自転車を乗り捨てて桟橋へ走るが、立ち止まる。
小宇「え……」
桟橋の入り口は封鎖されており、貼り紙には『強風につき午前の便は欠航します。午後の便は、天候の状況を見て判断します』とある。

○飛行機内（朝）
霧がかった窓の外を見つめる詠晴。

雲で見え隠れする沖縄（本島）。

○沖縄本島・安座真港
桟橋に停泊中のフェリー。
桟橋に駆け寄る詠晴、船員に
詠晴「あの、これ久高島行きますか？」
船員「今強風で運航見合わせてるんですよ」
と海の方に目をやる。
強風に吹かれて荒波の海。
×　×　×
穏やかな波。雲の切れ間に覗く夕陽。

○久高島・徳仁港（夕）
沖からやってくるフェリー。
桟橋に列をなす人々。
ベンチから立ち、列に並ぶ小宇。
桟橋に停まるフェリーから降りてくる
船員、いかりを下ろしながら
船員「前のお客様が全員降りてからご乗船ください」
列に並ぶ小宇、海を眺めている。
フェリーから降りてくる人々。最後に
降りてきたのは詠晴。
フェリーに乗り込む人々。列に続いて
フェリーへ歩き出す小宇。
すれ違うも気付かない小宇と詠晴。
が、立ち止まる詠晴。
キーキーと金属がこすれる音。
振り返ってハッとする詠晴。
フェリーに乗る寸前の小宇の姿。
詠晴「あっあの！」
小宇、気付かず。
詠晴「小宇さん！」
振り返る小宇。
小宇「えっ！　なんで……」
その場で見つめ合う小宇と詠晴。

○久高島・徳仁港付近の浜辺（夕）
水平線に沈みゆく太陽。
浜辺に並んで座る小宇と詠晴。

詠晴「全部わたしのせいなんです。お父さん、普段はスピード制限を絶対守る人で」
小宇「……」
詠晴「わたしが病気じゃなかったら……全部私のせいなんです」
小宇「……僕もずっとそう思ってました」
詠晴「……」
小宇「そもそも僕がボールを追って飛び出さなければ事故は起きなかったし。みんなの人生狂わせたの、全部僕のせいだって」
首を横に振る詠晴。小宇のズボンの左裾から覗く義足を見つめて
詠晴「将来の夢、ちゃんとあったのに」
と伏し目に。
立ち上がる小宇。
小宇「じゃあ、そろそろ帰ります」
詠晴「あっはい……」
小宇「よければ一緒に帰りませんか？」
詠晴「えっ？」
小宇「まだ4泊分残ってるので」
とはにかむ小宇。
涙ぐむ詠晴。

○さとうきび畑沿いの道路（夕）
夕陽を浴びて煌めくさとうきび畑。
自転車を漕ぐ小宇。後ろに座る詠晴、遠慮がちに小宇の肩に掴まっている。
小宇「今夜、何食べたいですか？」
詠晴「何でもいいです。あっ、デザートならあります。お土産に持ってきました」
小宇「台湾から？」
詠晴「はい。エッグタルトなんですけど」
小宇「エッグタルト……！」
詠晴「もしかして嫌いでしたか？」
小宇、肩越しに振り返って微笑む。
（了）